様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７０３１２

研究課題名（和文）西アフリカのクルアーン学校とタリベの動態と生活戦略に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study of Survival Strategies and Mobility of Qur'anic school and its Taribe in West Africa

研究代表者
清水　貴夫（SHIMIZU, Takao）

広島大学・教育開発国際協力研究センター・研究員

研究者番号：１０６３６５１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトでは、ブルキナファソのイスラーム教育機関である、クルアーン学校の生徒（タリベ）の日常生活と、近代教育が浸透しつつある中でのクルアーン学校の生存戦略に関する文化人類学的研究を敢行した。
本研究の調査は2013年度～2016年度にかけ、ワガドゥグ市シグ・ノーゲン地区の約30校の学校を対象に、文化人類学的な調査手法を用いて行った。
これらの成果は、論文3本、報告書1本、学会等口頭発表14件で公開した。2015年3月に本課題の成果を元に、ガストン・ベルジェ大学（セネガル）において、セネガル、フランス、日本の研究者、NGO関係者を集めてシンポジウムを開催するなど、国際発信にも力を入れた。

研究成果の概要（英文）：I conducted several researches during 2013-2016 about the survival strategies and mobility of Qur'anic school in Ouagadougou with the anthropological research methods. The research have been implemented in 30 Qur'anic schools and their taribes.
The results of this study have been published three articles, one report and 14 oral presentation in academic conferences. Moreover, I stressed to share my study in international conferences, especially, I had organized a symposium titled 'Des vies d'enfant en Afrique' with scholars and NGO staffs from Senegal, Burkina Faso, France and Japan at University of Gaston Berge in Senegal in 2015.

研究分野：文化人類学

キーワード：西アフリカのイスラーム　子ども　伝統教育と近代教育の相克

１．研究開始当初の背景

本研究が研究対象とする、現代西アフリカのイスラーム社会は、主に歴史学的かつ宗教学的な視点からこの地域のイスラミゼイションに着目して研究されることが多かった。こうした歴史研究の多くが、宗教（イスラーム）と経済（交易）にかかわるものであり、西アフリカのイスラミゼイションに寄与したのは、主にイスラーム商人たちであったことが論及されている。しかし、これらが実質的にどのように伝達されてきたか、すなわち民族誌的な研究はそれほど多くはない。また、イスラームにおけるクルアーンやハディースの伝達等、イスラーム子弟の教育が行われる「学校」は、祈りの場の整備や市場の整備とならび、イスラーム社会を構成する重要な構成要素となっている。さらにもう一方で、近年、最貧国と呼ばれたブルキナファソの初等教育の充実は目を見張るものがあり、イスラーム教育機関も注目されつつある。

本研究で扱うイスラーム系の学校は、もともと正しいムスリムとしてそれぞれのコミュニティの中でより善く暮らすこと、ムスリムとして祈りを全うするために存在してきたが、2005 年前後から多くのイスラーム系教育施設がブルキナファソ政府の認可を受けるようになりつつある。言い換えれば、近代化プロセスの中に組み込まれつつあると言えるだろう。それとともに、元々は村落の社会に埋め込まれ、時にマラブー（イスラーム宗教職能者）やタリベ（生徒）は、人びとからの喜捨を受けながら生活していた。ところが、クルアーン学校の特徴でもある、移動しながら学ぶことが、移動して口に糊することと重なり合うことにより、多くのクルアーン学校が都市に移動するようになった。そして、自活する手段を持たないクルアーン学校およびタリベは、ストリートにおける「物乞い」行為を行う。つまり、ここでタリベはストリート・チルドレンと同一視されるようになったのである。

以上のような通時的かつ共時的な背景から、もともとマラブーによる私的な教育機関であり、かつ社会に組み込まれていたクルアーン学校は、近代的な枠組みに組み入れられたのみならず、ストリート・チルドレンを生み出す問題を抱えた存在へと変容した。そして、ストリート・チルドレンとタリベは一つの属性の中で語られるようになり、NGO などの支援機関による「受益者」となっていったのである。

本研究以前に、私はストリート・チルドレンが、なぜストリートにとどまるのか、という問いを立て、支援者である NGO が展開するサービスにより、ストリートが貧困空間ではなく、むしろ子どもたちにとって、より暮らしやすい空間になっていることを指摘した（雑誌論文②）。さらに、本研究のきっかけとなったのは、あるストリート・チルドレンとの出会いである。彼は、8 月のある日（雨季）NGO のスタッフのバイクの後ろに乗り、私に収穫期が一段落する 9 月末頃に戻ってくると言い残して彼の家族の元に旅立っていった。果たして、9 月に彼はワガドゥグに戻り、「ストリート・チルドレン」として、NGO の庇護の元、職業訓練を受け続けたのである。もし、彼の事例が特殊なものでないとすれば、ストリート・チルドレンの存在そのものが問い直される必要があり、また、そこに含まれるタリベたちの存在も改めて考えなおす必要性があると思われた。

２．研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、内陸西アフリカのイスラーム地域におけるクルアーン学校の経営の変容とタリベ（生徒）の生存戦略の動態のメカニズムを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、研究論文や NGO、ブルキナファソや国際機関による報告による文献研究を基礎とし、現地における参与観察やインタビューによる調査により推進した。また、2013 年度、2014 年度には、統計調査を行い、調査協力団体（ローカル NGO）職員をはじめとする約 30 名のスタッフにアンケート調査の協力を依頼した。

４．研究成果

本研究の成果を、研究経過を踏まえながら報告する。

■2013 年度

これまでの文献調査の結果、NGO、国際機関、およびブルキナファソ政府はストリート・チルドレンの大多数がタリベであることを指摘してきた（KEOOGO2009 など）。本研究の主題である、タリベ、クルアーン学校の動態を検証するため、ストリートの子どもたちの統計調査を実施することとした。

この統計調査を行うに至った経緯は 3 点ある。まず、これまでの調査の中で、ストリート・チルドレンの中にタリベの割合はそれほど多くなく、まずはこの言説を客観的な数値を示すことで相対化する必要があった。次に、ストリート・チルドレンの問題系においては、子どもたちは家庭との分断されることにより、ストリートに居場所を求めることが通底する原因として語られている。しかし、ブルキナファソの雨季であり、天水農業を行う農村ではこの時期が最繁忙期となる。この時期、都市のストリート・チルドレンのシェルターは「ヴァカンス」をとるところが多く、その理由を「子どもたちが村に帰るため」だと説明される。つまり、ストリートの子どもたちの季節動態がある可能性があることが推測された。3 点目に、本研究開始以前から調査を補助してくれていた NGO は、2009 年にストリート・チルドレンの統計調査を行ったもの

の、それ以降は行っておらず、この点での貢献もこの調査を行った重要な理由であった。

よって、この調査は乾季と雨季に2度行い、ストリート・チルドレンの総数を確認し、比較分析することが行われた。第1回目の調査は2014年3月（乾季）に行われた（調査結果は2014年度の項に記載）。調査は、KEOOGO（ストリート・チルドレンを保護することを目的として活動するローカルNGO）の職員以下30名の助力を得て行われた。このアンケート調査では、ワガドゥグ市内中心部を5つのサイトに分け、それぞれに6名ずつを配置し、子どもたちが眠りにつく午後9時半から開始した。また、アンケート調査の項目は氏名、年齢、出身地などの基礎的な項目の他、家族状況やストリートで生活する理由、いかにストリートに至ったか、また、家族の元に帰った回数や頻度を質問した。（学会発表⑬、⑮）

この調査旅行中には、以下の項目に関しても調査を行った。（学会発表⑧、

a) クルアーン学校を経営するマラブーへの聞き取り調査
ワガドゥグで営まれる私塾的なクルアーン学校を経営するマラブーが、幼少期からどのようにクルアーンを学んだかということを、時系列的に聞き取りを行った。サンプル数は約30人。

b) フランコ・アラブ学校への訪問を開始
クルアーンの暗唱を完了することを教育的な目的とするクルアーン学校から、フランス語や数学をカリキュラムに入れ込んだフランコ・アラブ学校への聞き取り調査を開始した。

■2014年度

2014年7月（雨季）に第2回目のストリート・チルドレン統計調査を実施した。この調査も同年3月に行われた調査と同じ方法を使い、同じエリアで寝ている子どもたちを対象とした。

この2度の統計・アンケート調査の結果、表のように、乾季には353人の子どもたちが路上で夜を明かしており、雨季にはその数は219人ということが分かった。つまり、雨季には乾季の約3分の1にあたる134人分減少していたこととなる。

［表］ストリート・チルドレン数

	ZoneA	ZoneB	ZoneC	ZoneD	ZoneE
乾季	26	75	101	45	106
雨季	30	53	47	45	44

この数値を2009年の調査と比較すると、2009年には、路上で寝ている子どもたちは984人であったのに対し、この調査では219人から353人と大幅に減少していることがわかる。また、2009年には5,943人のタリベがいたことが報告されているが、今回の調査では全く確認しなかった。つまり、ストリートで寝起きするタリベはいなかった。

さらに、乾季には57%、雨季には41%の子どもたちが家族の元とストリートを往還していると回答している。また、家族状況を見ても、両親ともに失った完全孤児は数名しかおらず、多くの場合に戻る家族がいることも確認された。すなわち、従来、家族やそれまでに所属していた社会から分断され、居場所を失ったことでストリートに滞留すると考えられてきた「ストリート・チルドレン」と名付けられた子どもたちは、必ずしもそのような状況におかれているわけではないことが明らかとなった。（学会発表④、⑦、⑨、⑪）

この調査中には、以上の結果を踏まえて2015年度中にストリート・チルドレン保護活動を行うNGOおよび、ブルキナファソ社会行動省を交えたシンポジウムを開催することを計画し始めた。

■2015年度

2015年度は補足調査および、上記の研究成果の公表および、資料の共有のためにブルキナファソに渡航する予定であり、年度当初は2016年2月～3月の実施を予定していた。しかし、2014年10月のクーデタによる政権交代による政治的混乱、さらに2016年1月にはイスラーム過激派によるテロが発生した。2016年1月のテロは、私がシンポジウムを企画していたホテルの隣のホテルで発生したため、ワガドゥグ市でのシンポジウムおよび調査を中止した。この治安上の問題のため、急きょ開催地をセネガルに変更し、ガストン・ベルジュ大学宗教文化研究所（LASPAD、サンルイ市）の協力を得て、シンポジウム開催に至った。このシンポジウムでは、LASPADのほか、学振ナイロビ、総合地球環境学研究所のサポートを得て開催することができた。

シンポジウムは'Des vies d'enfant en Afrique（アフリカの子どもの生活）'と題し、ブルキナファソから調査協力者のSomé Maurice氏、フランスからBenoit Hazard氏ほか1名、日本からは、亀井伸孝氏、伊東未来氏、伊達聖伸氏ほか2名、学振ナイロビからは溝口大助所長、さらにセネガルからも6人の研究者に参加を得た。なお、このシンポジウムでは、"Les mobilité saisonelle d'enfant de la rue à Ouagadougou, le resultat de recherche statistique（ワガドゥグの「ストリート・チルドレン」の季節移動：統計調査の結果より）"というタイトルで、統計結果の公表および分析を発表した。（ワガドゥグでは、ホテルの会議室を利用しブルキナファソ社会行動省の職員、および10団体のNGOを招聘したシンポジウムを企画しており、この費用が全面的に必要なくなったため、残余予算を基金化し、2016年度の研究資金とすることとした）

■2016年度

2016年度は12月にブルキナファソに渡航した。この渡航では、まず、2015年に行うことになっていたシンポジウムの開催は予算の都合上叶わなかったため、主要協力団体を個別訪問し、資料提供を行った。また、同じく2015 年に予定していた継続課題 a)クルアーン学校を経営するマラブーへの聞き取り調査、b）フランコ・アラブへの聞き取り調査に加え、c）フランコ・アラブに通う生徒の家庭訪問を行い、家族傾向の把握、および、子どもをフランコ・アラブに通わせる理由の聞き取り調査、および、d）ストリートで物乞いをするタリベへの聞き取り調査を行った。

■課題

本科研費供与期間中には、タリベをストリート・チルドレンと同一化された貧困児童であることを前提として議論を進めてきた。しかし、2013年以降開始した、イスラーム教育機関を取り巻く環境は、すでに議論されつくされたかに見える、西欧近代化やポストコロニアルな問題群を改めて想起させる。残念ながら、2013年から2016年にかけ、ブルキナファソにおける様々な政治イベントにより、思うような参与観察的調査を行うことができず、下に述べるような課題は十分にアプローチできなかった。

イスラーム教育機関は、そこに関わる教師、生徒の生存と共に、宗教的要請を具現化するためにイスラーム教育機関の生存のために様々な手法を編み出している。そして、教育機会が充実しつつある現在、ブルキナファソにおいても教育熱の高まりはフィールドワークの中から実感させられる。しかし、子どもたちを学校にやる親たちの多くも、近代教育を妄信するのではなく、よく状況を観察しており、複数名の子どもを持つ親は、近代教育とイスラーム教育に振り分けて学校に通わせている事例も多かった。こうした民族誌的分析は、本研究の次のステップとして重要な課題となると考えている。

［参考文献］

KEOOGO, 2010, Rapport Annual 2009

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 清水貴夫・中尾世治・伊東未来・小林広英・亀井哲也,「サバンナの住まい：ブルキナファソ、カッセーナの「伝統」と変容」，『アフリカ研究』第 90 号.2016. pp.97-107.
② 清水貴夫,「「ストリート・チルドレン」を再生産する NGO-ブルキナファソ、ワガドゥグ市の事例から」.『文化人類学』81巻2号,査読あり、2016, pp.312-321
③ 手代木功基･清水貴夫　2016年6月 「セネガルの食と景観をめぐる謎」『地理』 Vol.61，古今書院．2016, pp.82-88.
④ 田中樹・伊ヶ崎健大・清水貴夫・真常仁志・飛田哲,「アフリカ半乾燥地での砂漠化への認識と実行ある対処技術の形成」『沙漠研究』24（3）.査読あり.2015. pp.349-353.
⑤ 清水貴夫，「ストリート・チルドレンから「アフリカ子ども学」をかんがえること」．『Child Science』 Vol.11,2015, p.56.
⑥ 竹ノ下祐二、亀井伸孝、阿毛香絵、清水貴夫、澤村信英，「＜学界通信＞ ＜第50 回 日本アフリカ学会学術大会「アフリカ子ども学フォーラム」報告＞ 「アフリカ子ども学」フォーラム：フランコフォン・アフリカの学校教育と「伝統」教育」．『アフリカ研究』83, 2013, pp.37-51.

〔学会発表〕（計15件）

① 清水貴夫，「[趣旨説明]サバンナの住まい　ブルキナファソ、カッセーナの「伝統」と変容」日本アフリカ学会第51回学術大会（分科会），日本大学生物科学部，神奈川県藤沢市，2016.0604-05
② 田中樹（地球研）・清水貴夫（広島大学），「西アフリカ半乾燥地での砂漠化対処と暮らしの向上へのアイデアボックス-「緑の頂上計画（GGWSSI)」への貢献を意識して-」システム農学会，九州大学，福岡県福岡市，2016.0528.
③ 清水貴夫，20160522，「驚き、学び、励ます：サーヘル地域の砂漠化研究における研究者と調査対象者のかかわりから」地球惑星科学連合，幕張メッセ，千葉県千葉市，2016.0522.
④ 清水貴夫,「制度化するイスラーム教育:ブルキナファソの事例から」第17回アフリカ教育研究フォーラム，名古屋大学，愛知県名古屋市，2016.0422-23.
⑤ 清水貴夫「風土に根ざす住まいの伝統と変容：ブルキナファソ・カッセーナの調査から　【趣旨説明】」．第233回中部人類学談話会,南山大学、愛知県名古屋市.（本人発表).中部人類学談話会・まるはち人類学研究会・地球研の共催，2015.1128.
⑥ Takao SHIMIZU Why his knee was broken?-Exposing the discrimination against an African resident in Japan. Asian Studies in Africa Challenges and Prospects of a New Axis of Intellectual Interactions, Ghana University, Accra, Ghana, 2015.0924-26.
⑦ 清水貴夫「ブルキナファソにおけるストリート・チルドレンの季節移動に関する

一考察-2度の統計調査より-」第52 回日本アフリカ 学会研究大会,犬山国際観光センター、愛知県犬山市 2015 .0523 -24 .

⑧ 清水貴夫「西アフリカ・イスラーム圏におけるフランコ・アラブについての予備的考察」第15回アフリカ教育研究フォーラム，広島大学、東広島市，2015.0410-11.

⑨ 清水貴夫 「ワガドゥグにおける「ストリート・チルドレン」の統計調査・調査結果」. 第 14 回 アフリカ教育研究フォーラム，総合地球環境学研究所、京都市，2014.1024-25.

⑩ 町慶彦、田中樹、真常仁志、清水貴夫「ブルキナファソ・中央北部州におけるザイの普及状況と地域住民による受け入れ」. システム農学会 2014 年秋季大会,京都大学、京都市.システム農学会優秀発表賞（北村賞）受賞，2014.1017-18.

⑪ Takao SHIMIZU, Is the problem of "street-children" is a "social problem" or a phenomenon on the urban space? Looking through anthropologist on NGOs (Ouagadougou, Burkina Faso). International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUEAS) 2014 with JASCA, Makuhari Messe, Chiba, Japan. 2014.0515-18.

⑫ 清水貴夫 ワガドゥグの「ストリート・チルドレン」統計調査：中間調査報告と今後の計画. 第 13 回アフリカ教育研究フォーラム,大阪大学、大阪府豊中市，2014 .0411-12.

⑬ 清水貴夫 「西アフリカ内陸部の「伝統」教育としてのクルアーン学校[その2] ニジェール共和国ファカラ地方の事例より」. 第 12 回アフリカ教育研究フォーラム，早稲田大学、東京都新宿区，2013.1025-26.

⑭ 清水貴夫 「ザルマ社会（ニジェール共和国）におけるクルアーン学校-ファカラ地方の広域調査から-」. 日本アフリカ学会第 50 回学術大会,東京大学、東京都，2013.0525-26.フォーラム「「アフリカ子ども学」フォーラム：フランコフォン・アフリカの学校教育と「伝統」教育」で竹ノ下祐二（中部学院大学、代表者）、澤村信英（大阪大学、コメンテーター）、亀井伸孝（愛知県立大学）、阿毛香絵（フランス高等社会科学研究院）と分科会を形成した。

⑮ 清水貴夫 「西アフリカ内陸部の「伝統」教育としてのクルアーン学校[その1] ニジェール共和国ファカラ地方の事例より」. 第11 回 アフリカ教育研究フォーラム，京都女子大学、京都府京都市，2013 .0412-13.「優秀研究発表特別賞」受賞.

〔図書〕（計 5 件）

① 田中樹（編）『フィールドで出会う　風と人と土』. 総合地球環境学研究所. 2017 年 3 月.（担当箇所:「アフリカの知恵と私たちが今すべきこと」pp20-23、「西アフリカ外食紀行　その1-西アフリカの食のコスモポリタン」pp34-36、「西アフリカ外食紀行　その2-セネガルの食の不思議」pp37-40（手代木功基と共著）、「「ト」の好み」pp41-47（宮嵜英寿と共著））総頁数 127 頁

② 田中樹（編）『フォトエッセイ　フィールドで出会う暮らしの風景』2017 年 3 月. 総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト，（担当箇所 pp.12-15, pp.45-46, pp.51-53, p.148, pp.160-165, p.216, p.226, pp.244-247, pp.306-307）総頁数 311.

③ 田中樹・石川智士・清水貴夫・遠藤仁（編）2016 年 3 月『人びとと出会い考える-総合地球環境学研究所 TD 座談会記録-』総合地球環境学研究所（編著）.（担当箇所：「表現することの可能性と限界-表現者と社会をつなぐもの」pp.245-318）総頁数 318.

④ 清水貴夫 2014 年 3 月「ニジェール共和国における伝統教育と社会 ザルマ社会のイスラーム教育」. 大塲麻代編 『多様なアフリカの教育- ミクロの視点を中心に-』. 未来共生リーディングス, Vol.5. 大阪大学未来戦略機構第五部門，大阪府豊中市，（担当箇所 pp.69-79）.総頁数 121.　（共著・査読有）

⑤ 清水貴夫 2013 年 3 月 「少年は NGO を飼い慣らす-アフリカの都市の少年たちの生存戦略」. シーダー編集委員会（編）『SEEDer』 (No.8).昭和堂. 担当箇所 pp.23-29, 総頁数 99 頁.（分担執筆・査読有）

６．研究組織

(1)研究代表者

清水貴夫（SHIMIZU, Takao）

広島大学・教育開発国際協力研究センター・研究員

研究者番号：10636517